

原発をなくし、安心できる社会をつくらうと、「さようなら原発」一千万署名市民の会の主催で、9・16さようなら原発全国集会を開催します。

【日時・会場】9月16日12時30分〜・代々木公園B地区

原発をやめて
明るい未来を



東京土建のホームページ <http://www.tokyo-doken.or.jp/>

印刷部数11万1700部
(購読料は組合費のなかに含まれています)
(年間購読料 千八百円) 定価 五十円

東京都新宿区北新宿1-8-16
東京土建一般労働組合
電話03 (5332) 3971 (代表)
FAX03 (5332) 3972
発行人・編集人 三木 勉

全都活動者会議&拡大決起集会

TKPガーデンシティ品川に484人

秋の大運動の成功誓う

要求実現めざし組織拡大を

7月28日、東京土建はTKPガーデンシティ品川で、「秋の大運動・拡大月間成功に向けた全都活動者会議&拡大決起集会」を開催しました。全36支部から484人が参加し、仲間を活かし、仲間が育つ秋の大運動を成功させようと誓い合いました。

第1部の活動者会議の冒頭、松丸委員長は、「どのような取り組みでも組織増勢は強く求められる。私たちの運動に自信と確信をもって全支部が目標達成に向けて奮闘をお願いしたい」とあいさつしました。

果たず役割は大きく、私たちの運動が未来を切り開くと強調しました。

全建総連の奈良書記次長の講演では、改正「担い手三法」成立をはじめとした建設産業をめぐる情勢にふれ、この5年間で団塊世代が後期高齢者に移行し、建設産業や組合に甚大な影響があるが、組合の

果たず役割は大きく、私たちの運動が未来を切り開くと強調しました。

小番書記長の基調報告では大会後の諸運動を総括。参議院選挙後の政治・経済情勢にもふれ、群・分会活性、機能強化を基盤とした人づくり、産業民主化運動と組織運動の連携、地域社会貢献、アスベスト訴訟第3陣提訴の意義を強調し、被害者の掘り起こしと最高裁判所公正判決署名への協力を強く訴えました。さらに吉田首都圏アスベスト訴訟東京原告団共同代表が訴訟への協力を呼びかけました。

果たず役割は大きく、私たちの運動が未来を切り開くと強調しました。



奈良全建総連書記次長の講演を聞く参加者

特別報告「最高裁判所判決!!第3陣組織に向けて」で、横澤労対部長がアスベスト訴訟第3陣提訴の意義を強調し、被害者の掘り起こしと最高裁判所公正判決署名への協力を強く訴えました。さらに吉田首都圏アスベスト訴訟東京原告団共同代表が訴訟への協力を呼びかけました。

続いて、新宿、小平東村山、江東の3支部が活動報告を行い、第1部を閉会しました。第2部の拡大決起集会では、榎山組織部長の拡大月間成功への訴えに続いて、松丸委員長、榎山組織部長、小番書記長がダルマの目入れを行な

いました。主婦の会、シニア友の会、書記代表、36支部が決意表明を行ない、「チームEDOGAWA」(役員・分会・書記局)の総合力で目標をつかみとろう! (江戸川) など力強いスローガンを掲げて登場。最後に中村副委員長が閉会あいさつと団結がばらばらを行ない終了しました。

榎山組織部長が秋の拡大月間の基本方針を提案。夏の大運動の特徴にふれた後、目標をやり切る構えと行動体制の確立、新3つの組織活動の強化、事業所の組合結集強化、全世代対話などの拡大月間の行動重点を明らかにし、「私たちが前を向くという変化を支部、分会、群に伝播させ、東京土建全体が前進できるように共通認識とともにながらばいていきたい」と述べました。

「吉田重男首都圏建設アスベスト訴訟東京原告団共同代表の報告」私たちの2陣訴訟も9月27日、地裁法廷で結審を迎えます。判決は来年春ごろです。先に神奈川、大阪、京都、東京の1陣の判決で、国は10度、メーカーも5度、また一人親方への責任の判決も言い渡したのに、最高裁に上告しました。



吉田さん

3陣提訴で全面救済

勝利判決と早期解決導く

用されてきました。この年代に国もメーカーも肺に疾患を及ぼす事実を世界から知らされていたのに、経済発展と会社の利益を優先し、労働者の命を危険にさらし、働かせ続けてきました。

私は野田場で兄弟3人と仲間、左官タイル工として、2010年頃まで働き、モルタルの混和剤にアスベスト鉱石が含まれ、このために40数年後、次兄が2011年5月、71歳で、翌年6月、三兄が69歳で亡くなりました。私もびまん性胸膜肥厚で苦しむ、71歳の今は三兄の遺族原告でがんばっています。自分自身も3陣原告になり、全ての人々がアスベスト疾患の被害を受けても補償される被害者補償基金制度の早期創設を訴え、先頭になってがんばります。今後の支援、応援をよろしくお願いします。

「1970年代前後に建築基準法で2時間耐火の法律が施行されてから、アスベスト鉱石を含ませた製品が現場に使



江戸川支部の決意表明では「1万人札」が登場

■新海誠監督の「天気の子」は「天候の調和が狂っていく時代」の物語だ。映画の中で水没していくリアルな東京の様子を観ながら、これは大災害であって、現実であれば人々の暮らしに大きな打撃があるはずで、悲劇に見舞われる人もいるのではないかと考えるのがよぎった。

異常気象を世界的な視野で見ると、気候変動が進んでいる事態として捉えられる。とくに途上国では、海面上昇や砂漠化など、国や地域の自然環境を大きく変え、年間2000万人から3000万人近い難民を生み出しているという。途上国だけでなく、先進国でも被害は深刻だ。この夏の日本をみても日照不足と低温が続いたあと、一転して猛暑に襲われ、あぐくに大型台風に見舞われた。

■気候変動の原因であるCO₂などの温室効果ガスを先進国が自国で減らし、途上国に気候変動対策への支援を行なう、「気候正義」という考え方があがる。化石燃料をこれまであまり使っていなかった、途上国の人たちが被害を受けている不公平を正そうということだ。異常気象による災害が続いている、日本の現状に照らしてもこの考え方を押し進めるべきだろう。石炭火力発電所の国の内外での推進を見直し、脱炭素化を真剣に取り組むなどやるべきことはたくさんある。